

書評：『虚実のあわいに』：大浦康介退職記念論文集

松尾, 剛
立命館大学法学部：教授

<https://doi.org/10.15017/4355461>

出版情報：Stella. 39, pp.217-220, 2020-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

《書評》

『虚実のあわいに』

——大浦康介退職記念論文集——

松 尾 剛

サブタイトルの示すとおり、本書は京都大学人文科学研究所を2017年3月に退職した大浦康介氏に捧げられた論集である¹⁾。国内外を問わず総勢60名の執筆陣から、日本語あるいは仏語で寄せられた稿は、「エッセイ」「ひとこと」「研究ノート」とバラエティに富み、読者をして倦ませることがない。わけても大浦氏の論考を掉尾に配した「研究ノート」は、章題が謙虚に過ぎると思えるほどに、質の高いフィクション論を集めている。書評者のような門外漢にも示唆に富むものも多く、その意味で文学研究者ならばすべからく一読すべき書と言えよう。にもかかわらず、まことに残念ながら退職記念論文集としての性質上、同書は非売品であり、それゆえ参照は必ずしも容易ではない。そこで本稿では、この種の書物が書評対象として一般的ではないのを承知しつつも、また文学理論を専門とせぬ者にその資格ありやと躊躇を覚えつつも、成果の豊かさに鑑み紹介を試みたい。

本書はなによりも多幸感に満ちた書物である。例えば巻頭に置かれた「インタヴュー」は、大浦氏の略歴紹介にとどまらず、70-80年代フランスの知的風土の証言ともいえるもので、クンデラ夫妻との交歓や、ジュネット・ゼミの風景、あるいはパリでの文化活動をめぐる談話を読むと、賛嘆を通り越して羨望すら覚える。なんとも華麗にして贅沢なフランス滞在ではないか。あるいは「エッセイ」と「ひとこと」からは、退職者に寄せる書き手たちの信頼が看取され、かくまで強固な信頼関係が研究活動を通じて構築されたことに賛嘆を禁じ得ない。一例を挙げれば、ピエール・バイヤール氏のエッセイ——朝の眠りを妨げる大浦氏の電話に対する愚痴に始まり、翻訳者としての同氏への称賛に終わる巧みな筆運びは、『読んでいない本について堂々と語る方法』の著者ならぬのだが、構成の妙にも増して感得させられるのは、大浦氏に寄せるバイヤール

ル氏の敬意と信頼である。翻訳とは裏切りであるとの俚諺とは異なり、じつに幸福な交友関係が垣間見える。

「研究ノート」について言えば、ノートと呼ぶには余りに質高く、フィクション論の門外漢にも有益な考察が目白押しであるのは上述の通り。憚りながら書評者は政治的文学に関心を寄せる者であり、いわゆる詩学とは縁遠い領域にいる。そんな人間にとっても、本書収載の論文は非常に興味深い。文学理論における契約の概念を手掛かりに、読者論に潜む政治的な含意を剔抉するエリック・アヴォカ氏の考察や、正統性を保証する最終審級の不在を民主主義の本質と見、その痕跡を『阿Q正伝』と『それから』に探るセバスチアン・ヴェグ氏のそれは、作家の社会参加を研究する身にも大きな示唆を与えてくれた。だがとりわけ驚嘆させられたのは、論考のいずれもが文学理論に疎い者にも十分に理解できるよう書かれていたことである。そして、その分かりやすさを招来したのもこそ、大浦康介氏の研究姿勢ではなかつたらうか。というのも氏は、冒頭の「インタビュー」でジュネットを論じつつも、「でもこんな話、専門家以外は興味ないでしょうから、もう少しとつきやすい話をしましょう」（6頁）と語り、あるいは巻末のフィクション論では「話が専門的になってきたので、もう少し分かりやすく説明する」（238頁）と述べて、素人にも届く言葉を紡ごうとするのである。学的隠語を極力排し、透明性高く、かつ高度な「研究ノート」の論考は、外部に開かれた氏の言説におそらく呼応しているのだ²⁾。できるだけ多くの読者に届く平易な言葉で、可能なかぎり明晰に語るべし——。フィクション論を通じて、このような共通認識が得られたのだとしたら、これまた幸福かつ豊穡な研究活動の成果であると言わねばなるまい。

かくのごとき幸福の書を締め括るのが、大浦氏本人の手になる「フィクションについて最近考えた二、三のこと」である。同論は、蓮實重彦の著書『「赤」の誘惑』を批判的に検討しつつ、大浦氏自身のフィクション観を展開するものである。具体的には、フィクションの本質を非ミメシス的性格、すなわちテキスト外の何物をも再現しないことに求める蓮實に対し、テキストと現実の関係こそがフィクション性の要であるとするのが、大浦氏の立場である。サールやジュネット、あるいはルジュンヌを引用しつつ、テキストの虚構性を語用論的なレベルに求め、作者と読者のコミュニケーションの在り方こそが、虚構性のマーカーであるとする氏の主張は説得的だ。だが門外漢の書評者にとって何

よりも気になるのは以下の一節である——

哲学的著作にたいするこの破格の読みが、それじたいとしてある種の魅力を湛えていることはたしかである。「そんなふうにも読めるんだ」と感心する向きもあるだろう。しかし、それは同時に、理論的テキストに真摯に向き合うことの拒否であり、理屈に理屈で応えることからの撤退ではないかと私などは思う。(243頁)

推測ながら、蓮實に対する大浦氏の苛立ちの根本はこの辺りに存するのではあるまいか。氏によれば、『『赤』の誘惑』の著者はもっとストレートに、虚構作品の分析を通して、自身の信じるフィクション観を提示すべきであった。「そうすればわれわれは『主題論的フィクション論』とでも呼ぶべきものを、既存のフィクション論の断片的でしばしば恣意的な批判という『雑音』なしに、目の前にできたはずである」(245頁)。つまり筆鋒鋭く氏が批判するのは、蓮實の理論的側面よりも、他者の虚構論と対峙せぬ姿勢にあるように、書評者には思われるのだ。

もちろん大浦氏は、『『赤』の誘惑』のフィクション論に賛同しているわけではない。それどころかテキストの内部に虚構性を求める蓮實説には、フィクションの問題を社会に開放する契機が欠落していると厳しく批判している。この点を重視するならば、先の引用を大浦論文の要諦とするのは誤読にすぎぬとの批判もありえよう。それでも著者の『対面的——〈見つめ合い〉の人間学』を読んだ者としては、「真摯に向き合うことの拒否」にこそ、蓮實批判の出発点を求めたくなるのだ³⁾。

眼差しを向け合う者たちのあいだには何が生起しているのか。『対面的』の著者は、プーストやモーパッサンの小説はもちろん、ブーバーやレヴィナスに至る哲学までも参照しつつ、恋愛や決闘は言わずもがな、眠りや窃視のごとき非対面的のシーンをも詳細に検討していく。他者との向かい合いこそが人間の運命とする大浦氏にとって、「理論的テキストに真摯に向き合うこと」を拒絶する『『赤』の誘惑』は容認しがたいものであったろう。

他方で、立場を異にする論者との対面を恐れず、「真摯に向き合う」大浦氏の姿勢こそが、この論集を幸福感溢れる書物にしたのだ、書評者としてはそう思いたくなる。『対面的』の著者は木村敏を引きながら、見つめ合いから生じる磁場を、演奏会で立ち現れる「個人の意志を超えたひとつの強大な意志」のよう

なものと理解していた。もしかすると『虚実のあわいに』の多幸感、論者たちの対面から生じた「個人の意志を超えたひとつの強大な意志」が、オーケストラとなって生み出した交響曲の如きものなのかもしれない。「エッセイ」や「ひとこと」がしばしば、他者に向かって開かれた大浦氏の研究姿勢に賛辞を寄せていることに鑑みれば、書評者のこの推測もあながち的外れとばかりも言えない。

翻って、新型コロナウイルスへの対応に追われる大学教員が、オンライン授業への切り替えを余儀なくされ——書評者もそのひとりである——、これに歩調を合わせるかのように、対面型授業という言葉が消極的な意味で使われがちな今日の教育界を、大浦氏ならどのように考えるだろうか。『対面的』の「あとがき」で、学校の授業は「教師と生徒が向き合う対面型から、なんらかの視覚教材を介在させた非対面型にますます移行してゆくだろう」と予測していた著者に、意見なり助言なりを求めたい気もするが、それは書評者の甘えというものだろう。

はや紙幅も尽きた。要らぬ感慨はここまでにしておこう。かくまでに豊かな成果を誇りながら、退職記念論文集という性質上、多くの人の目に触れぬことを惜しみ、例外的とは知りつつも、これを書評対象とした。諒とされたい。

註

- 1) 『虚実のあわいに』、大浦康介退職記念論文集編集委員会（久保昭博・河田学・岩松正洋編）、2019年3月。
- 2) じっさい、藤原辰史氏は「エッセイ」に寄せた一文で、老若男女だれにでも理解可能な概念で研究を語るよう大浦氏に諭された経験を語っている。大浦氏によれば、それは共同研究を使命とする人文研固有の「宿命」らしい（10頁参照）。
- 3) 大浦康介『対面的——〈見つめ合い〉の人間学』、筑摩書房、2016年。